## 世代を超えた絆に導かれ再びアカメの海へ。

香川県在住のimaテスター濱本国彦。彼の呼びかけで始まったSWAP（Salt Water Angler's Party）。小林厚治は、参加者としてその会場にいた。会場に出展されていた小さなブースに、巨大なアカメの写真がところ狭しと並んでいるのが目に入った。

「これどうやって釣ったの？」と出展主に尋ねると「全部ね、僕の船で釣ったんですよ。難しいけど、釣れますよ」という答えが返ってきた。にわかには信じられなかった。それが「やまひろつりぐ」山本浩雅氏との出会いだった。濱本国彦が間に立つと、会話はより弾んだ。「厚治さん、僕がご案内しますよ」と山本氏は小林厚治に約束した。この時から、彼のアカメ熱は再燃する。

絆を大切にするためにSWAPを主宰する次世代のアングラー、濱本国彦が運んできた縁で、アカメへと続く道が、彼の前に再び開けたのである。

週末に高知へと通う日々が戻ってきた。山本氏は、多忙なスケジュールの合間を縫って小林厚治を乗せ海に出た。そしてさまざまな縁でつながった、高知に住むたくさんの仲間が遠征毎に彼を温かく迎え入れ、全力でサポートした。やまひろつりぐの船が出せないときは、仲間の船が代わりに出船したこともあった。一緒に釣りをする若きアングラーたちは、「アニキに釣ってほしいから」と自らのロッドを置くことも多かった。

その思いに応えようと、小林厚治は精力的にキャストを続ける。

時は経っても彼の情熱と行動力は、微塵も衰えてはいなかった。

釣りを楽しみながら、時には海辺で休みながら会話を楽しんだりロッドをしまって呑みに行ったり、仲間と過ごす時間を楽しむことも忘れなかった。彼にとっては、目指す魚との出会いと、釣り場で共有する仲間たちとの時間とは同じくらい大切なことだったのだ。

2011年11月25日。この日の小林厚治は、高知在住のimaテスター西村好仁、同じくimaテスター今井隆道と共に、夜の浦戸湾へ静かに出航した。50〜60㎝のボラが群がってステイするシャローエリア。ルアーは、ima Hound125F Glide。

一投目。ボラに当たりながらゆっくりと泳がせていると、ボラ達が狂ったように逃げまどい始めた。一瞬、ルアーの重みが消え、そして動かなくなった。次の瞬間、ラインは巨大な力に引きずられて暴走を始める。

ドラグは間断なく叫び、一気に50m以上ラインが引きずり出された。

「必ず獲れる」小林厚治は自分にそう言い聞かせ、丁寧にポンピングを繰り返し魚を少しずつ手繰り寄せていった。やがて相手は浮き上がり、水面にその姿を晒した。

「デカイ！」ランディングに備え、見守っていた仲間たちは息を呑んだ。

1m20㎝、20㎏あろうかというアカメだ。ようやく船縁に寄せ、いよいよランディングしようとした時だった。

疲れていたはずの相手は突如その膂力を爆発させた。強烈なエラ洗いに水面が激しく割れ、魚は突進する。

ガイドを破壊し、ロッドをへし折り、40Lbのラインをブレイクさせ全てを振り払って巨大アカメは海へと消えた。

その場にいた誰もが言葉を失った。

アカメは、またしても小林厚治の手に落ちるのを拒んだのである。

それでも彼は落胆しなかった。このような興奮を与えてくれたアカメと浦戸の海、そしてここまで連れてきてくれた仲間たちに感謝することを忘れなかった。

遠征の日々は続く。

そして2012年5月11日、遂に20年越しの夢が叶う、その日が訪れたのだった。

小林厚治を浦戸湾へと導いた「やまひろつりぐ」店主山本浩雅氏（写真右上）。高知市内のこぢんまりとしたショップにはマニア垂涎の釣具、キャンプ道具、本などがオモチャ箱をひっくり返したようにうず高く積み上げられている。元はフライマンの為にボートを出していたキャプテンではあるが、近年ルアー狙いにも精力を注いでいる。土佐弁と相まって少しぶっきらぼうに見えるが、その実は情に厚い「いごっそう」である。氏の周りにある数々の道具を眺めてみる。オールドフライタックル、マテリアル、洋書、キャンプストーブ、コッフェル、石油ストーブ、サングラス、ミルスペックのブーツ、セーター、上着に至るまで、好きなものに徹底的にこだわり抜くその生活は、当然ボートガイドにも発揮されている。ポイントを知り尽くし、流れと時間、ルアーを投入する角度に至るまで研究され尽くしている。当然釣果にも眼を見張るものがある。そしてゲストと共にそれを喜び楽しむその姿には「釣りのある人生」が滲み出ている。